生まれ変わる武蔵水路

第3回　水とのたたかいの歴史

環境省環境カウンセラー・若林高子

埼玉県名発祥の地・行田

武蔵水路が流れる行田市・鴻巣市は、関東平野の内陸部に位置しています。利根川と荒川の運んだ肥沃な土砂が堆積して自然堤防が形成され、両河川の支流や伏流水が湧き出して、古代から豊かな水利に恵まれ、集落や交通路が開けてきました。

行田市には、5世紀後半から7世紀頃までに造られた古代遺跡や大型古墳が数多くあります。中国や朝鮮半島で始まった古墳文化は3世紀に日本で開花し、5世紀後半になると、西日本を超える大型古墳が関東地方で造られるようになりました。

埼玉古墳群は、東日本最大の規模で、9基の大型古墳が集中しています。

なかでも稲荷山古墳から出土した国宝・金錯銘鉄剣には、国家の成立を読み解く115文字が刻まれており、この鉄剣の発見によって、大和朝廷と深い関係をもつ豪族がいたことが明らかにされています。すぐそばには、二子山古墳や丸墓山古墳、将軍山古墳などが点在し、出土した副葬品は、埼玉県立さきたま史跡の博物館におさめられています。利根川右岸の酒巻古墳群から出土した馬形埴輪は、ほぼ完全な形で出土した日本で唯一の「旗立て馬」です。

また、浅間塚古墳の真上にある前玉神社は、千数百年の歴史をもつ古社で、平安時代には「埼玉・佐伊太未」の表記が見え、埼玉県の東部地域を「さいたま」郡と読んでいたことが判明しています。その後、明治維新の廃藩置県で、最も広く知られた郡名の埼玉が採用され、埼玉県が誕生しました。

武蔵武士・成田氏の台頭

戦国時代の争乱が始まった15世紀半ば、武蔵国では生え抜きの武士が台頭しました。なかでも成田氏は、後北条氏と上杉謙信が激しい攻防戦を繰り返す中で巧みに勢力を伸ばし、上杉軍の後退が目立つ

金錯銘鉄剣が出土した稲荷山古墳

日本で唯一の旗立て馬（埴輪）
（提供・行田市郷土博物館）

と後北条氏に属しました。多くの領主が後北条氏に滅ぼされる中で、成田氏だけは忍城（おしじょう）を中心とする忍領のほか、本庄領（本庄市）や騎西領（騎西町一帯）、さらに羽生領（羽生市一帯）にまで独自の領域支配を展開し、小田原本城主・後北条氏からもほとんど介入を受けない“独立領国”的な存在でした。

難攻不落な忍城と水攻め

天正18年（1590）、豊臣秀吉は小田原城を包囲すると同時に、後北条氏配下の諸城を攻めるため、石田三成を総大将として約2万人の軍勢を忍城に差し向けました。三成は忍城が一望できる丸墓山古墳の上で陣頭指揮をとり、忍城を取り囲むように堤防を築き、攻撃を開始しました。

忍城は室町時代の文明年間には築城されていた“浮き城”の異名を持つ要害堅固の城で、城下に行田のまちを配する壮大なものでした。

忍城主・成田氏長（うじなが）は、小田原城に籠城していたため、忍城は一族や家臣、農民ら約3千人が守り、1か月余りに及ぶ攻防戦に耐え抜きました。この逸話をもとにした和田竜著『のぼうの城』はベストセラーになって映画化され、忍城の名を一躍、世に広めました。三成の築いた堤防は石田堤と呼ばれ、その一部が行田市と鴻巣市の武蔵水路周辺に残されています。

その後、小田原城の落城により後北条氏は滅亡、豊臣秀吉は天下統一を果たし、関東の戦国時代は終わり、時代は近世へと移っていきます。

その後の忍城

慶長８年（1603）、徳川家康が江戸幕府を開くと、忍城は徳川氏の直接の支配下におかれました。

三代将軍家光の時代、老中・阿部忠秋（ただあき）が藩主になり、以後、阿部家は184年にわたって忍藩を支配しました。阿部氏の所領高は10万石を超え、「老中の城」にふさわしく城郭などが整備されていきました（関東7名城のひとつ）。

明治６年（1873）、かつての城は取り壊され、堀も埋め立てられました。昭和63年（1988）、本丸跡地に「忍城御三階櫓（ごさんかいやぐら）」が再建され、内部は行田市郷土博物館に連なる展示室に生まれ変わり、最上階からは利根川などが一望できます。

忍城御三階櫓（復元）

忍藩領分絵図。近世後期に描かれた忍藩領分と他領の村々の図。
（提供・行田市郷土博物館）

寛永年間に参勤交代が制度化されると、大名は江戸居住が義務づけられ、忍城の周辺には中山道（なかせんどう）、館林道、日光脇往還が整備され、多くの人や物が往来し、にぎわいを見せるようになっていきました。古墳や忍城は道行く人々からもよく見えたようです。

忍の地に　山なし、谷なし
**　　されど、城あり　古墳あり　関所あり**

徳川家康の関東支配

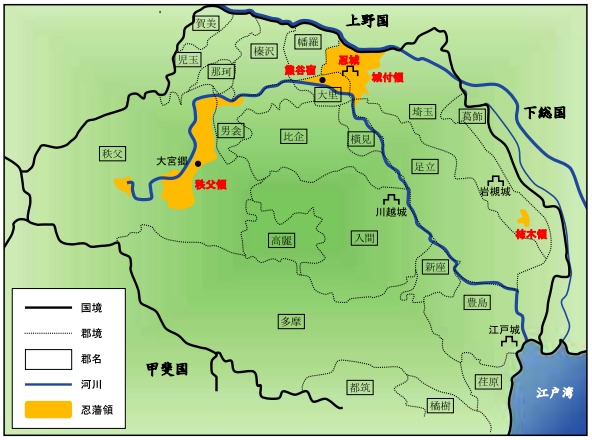
豊臣秀吉は天下統一を果たすと、徳川家康に関東への国替えを命じ、天正18年(1590)、家康は関東に入国すると、すぐに武蔵国の掌握に着手しました。文禄2年(1593)には鴻巣御殿を建て、鷹狩りにことよせて、しばしばこの地に足を運び、飲料水の確保や田畑の収穫の様子などの情報収集を行いました。

家康は関ヶ原合戦に勝利して征夷大将軍となり、慶長8年(1603)に江戸幕府を開くと、江戸を洪水から守ることと、新田開発に力を注ぎました。

三河以来の譜代家臣で検地にあたる伊奈忠次を関東代官頭(関東郡代)に任じ、領国の治水事業にあたらせました。

忠次は検地・産業開発・治水かんがい用水路の整備など、多方面にわたり思い切った基盤整備を進め、幕府財政の基礎を築きました。

武蔵国の忍藩領　正徳2年(1712)時点



(提供・行田市郷土博物館)

忍藩領は忍城の城付領だけでなく、荒川流域の秩父領や柿木領、近畿地方の摂津国にまで及び、所領高は10万石を超えていました。

河川改修と新田開発―関東流

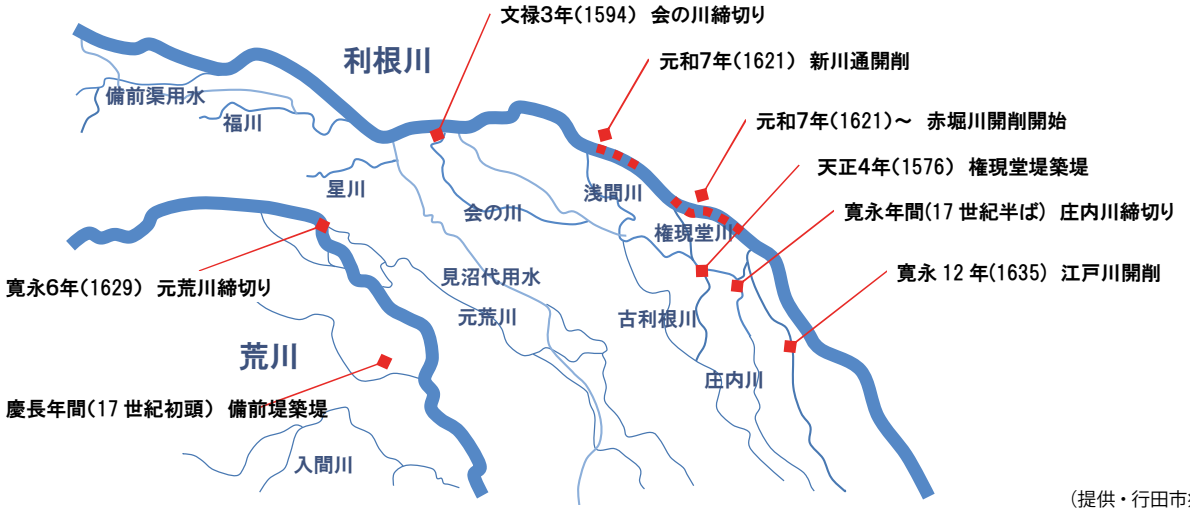
当時の利根川は、きわめて複雑な流路だったので、忍藩時代にも河川改修が行われていました。文禄3年(1594)、忍城主松平忠吉の家臣・小笠原三郎左衛門が会の川を締切り、利根川を東に切り替えたのが、利根川瀬替えの第一着手とされています。

第2回の瀬替えは元和7年(1621)、伊奈忠治によって行われました。忠次の仕事を継いだ忠治は、大規模な基盤整備事業を行いました。そのひとつが利根川の瀬替えで、元和7年に開削した新川通は、いくつもの川筋を整理し、ほぼ直線的に渡良瀬川筋につなぎました。同年に開始した赤堀川の開削は、下総台地を開削する大工事で、その子忠克の代の承応3年(1654)にようやく完成しました。

忠克は利根川右岸の本川俣(現羽生市)に取水口を設けてかんがい用水路を開削(幸手領用水)し、古利根川下流域の10か領をうるおす葛西用水を完成させました。葛西用水は、下流部の溜井(用排水調節池)から順次上流に水源を求め、排水や余水を集めて用水として反復利用する合理的な水システムで、今も琵琶溜井、松伏溜井、瓦曽根溜井に昔日の面影を残しています。

伊奈氏代々の河川工法は伊奈流あるいは関東流と呼ばれ、洪水は自然堤防や不連続堤防で防ぎ、大洪水は遊水地などに滞留させ、洪水に含まれる肥沃な土を堆積させる手法で、治水と新田開発を両立させました(荒川については紙数の関係で省略)。

近世初期の河川改修



(提供・行田市郷土博物館)

これらの利根川・荒川の治水かんがい工事によって多くの新田が開発され、人口と村落が増加しました。「葛飾、埼玉、足立」の3郡からなる武蔵国は、天正年間から元禄年間の約100年間に、石高は約200％の成長を記録したということです。

その後、利根川が現在のように千葉県銚子沖から太平洋に注ぐようになるまでには、数々の河川改修が行われ、「利根川東遷」が完成するまでにおよそ400年を要したといわれています。

見沼代用水―紀州流

幕藩体制が確立されておよそ100年あまり、8代将軍・徳川吉宗は、破たん寸前の幕府財政を立て直すため、紀州流の農業土木で成果を上げていた井澤弥惣兵衛為永を普請奉行に登用し、新田開発政策を推進しました。(「享保の改革」のひとつ)

弥惣兵衛の見沼開発の方法は関東流と異なり、既存の沼を干拓して新たに用水路を開削し、用水と排水を分離するものでした。

見沼溜井の代用水として、利根川の右岸下中条(現行田市)地先に元圦(取水口)を設けて取水し、水路は星川の流れを利用して元荒川を柴山の伏越(逆サイホン)でくぐり、綾瀬川の上は、瓦葺掛渡井で横断し、その先で東西両縁に分離し、見沼たんぼの用水源としました。一方、見沼の中央に芝川を開削して、用水と排水の分離を行いました。開削された見沼代用水路の延長は約53.1kmで、享保13年(1728)、着工以来6か月で完成。新たに1200haの新田が生まれ、毎年5000石の年貢が確保されました。

その後、収穫した米を江戸に運ぶため、見沼代用水と芝川を結ぶ水路・見沼通船堀を造りました。高低差3mの段差を閘門式で解決した原理はパナマ運河と同じ、弥惣兵衛のほうが180年も早く、国の史跡に指定されています。

見沼代用水イラストマップ（提供・見沼代用水土地改良区）

弥惣兵衛の工法は紀州流と呼ばれ、享保の改革を始めて10年余りで幕府の財政は黒字になり、その後、江戸は百万人の大都市に発展しました。

利根川・荒川の治水と利水には、幕府が深く関与し、受益の村々で制度的に維持されるようになりました。忍領普請組合は寛永12年(1635)、最も早い時期に成立。111か村で構成され、とりわけ阿部家が藩主となって以降、利根川・荒川の治水・利水に深く関わったことが記録されています。

見沼代用水の工事には延べ約90万人が従事したとされています。暮れから春にかけての河川工事には多くの農民が駆り出され、人海戦術で苦労して水路を掘り、堤防を築いたのです。

このように、武蔵水路周辺には水とのたたかいの歴史が数多く残されています。近代以降については、次号でご紹介します。

見沼代用水

【参考文献など】

『埼玉県の地名』　日本歴史地名体系11　平凡社　1993年
『利根川ものがたり』　河川情報センター　1995年
『利根川 人と技術文化』　北野進・是永定美編　雄山閣出版　1999年
『アーカイブス利根川』　宮村忠監修、アーカイブス利根川編集委員会編　信山社サイテック　2001年
「井澤弥惣兵衛為永」　見沼代用水土地改良区　2015年
「常設展示解説図録」　行田市郷土博物館　2014年
「忍の街道をゆく―中山道・館林道・日光脇往還」　行田市郷土博物館　2015年
「行田市市制要覧　2009」、「鴻巣市市制要覧　2014」
その他、パンフレット類